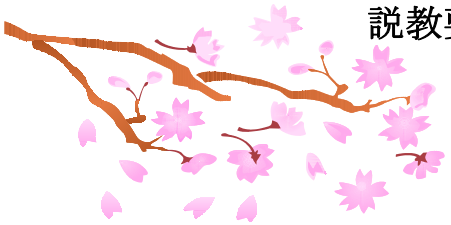

説教要旨「新しい時代の始まり」

ルカによる福音書２３章４４～４９節

イエス様が十字架につけられたこの日、昼間でありながら全地が暗くなり、太陽は光を失いました。それは、世界を照らす神の恵みが失われたということであり、神がこの世界を見放したことの表れです。神の独り子、救い主イエスを十字架につけた人間は、神の恵みを失ったのです。それは「神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた」（44 節）ことにも象徴されています。人間が神様を礼拝するための場所でである神殿が破壊され、人が神とつながる術が失われたのです。神様とつながる道が閉ざされてしまうということに世界を覆う暗闇の本質があります。そのような闇の現実の中に、イエス様の叫び声が響きます。

「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」（46 節）。

もはや神は、罪人である人間たちを見限り、遠く離れ去られたのです。しかしその暗闇、神に見捨てられた絶望の極みである十字架の上から、神の独り子であるイエス様が、遠く離れ去ろうとしている神様を呼び戻すために「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」と大声で叫んでくださったのです。そして息を引き取られました。この神の独り子の死によって、神様と人との関係をつなぎとめ、新しい世界が開かれていきます。

異邦人であるローマの百人隊長はこの出来事を見て、『本当に、この人は正しい人だった』と神を賛美しました。また、裁判のときにイエス様を十字架につくるように要求し、敵意をもってその処刑を見物していた群衆も、イエス様の最後を見て、「胸を打ちながら帰って」（48 節）行きました。彼らの内に自分たちのしたことを悔いる思いが生じています。一度は、神様とのつながりが完全に絶たれた罪人が、イエス様の執り成しによって再び神様とつながりに生きるものへと変えられるのです。

自分の思いばかりを優先し、思い通りにならないとみれば、「神などいない」と嘯くわたしたちの罪が、救い主を十字架につけました。しかし十字架上のイエス様は、見限られて当たり前のわたしたちのことを神様に執り成して下さり、神様とつながりなおす道を開いてくださったのです。

（２０２１・４・１１　説教者：稲垣真実）